

【研究ノート】

原爆の記憶と観音像

—広島・長崎の公園の事例から—

君島 彩子

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

本稿は、広島と長崎の公園に建立された観音像の事例から、原爆の記憶について論じたものである。観音像は「原爆死者」や「原爆災禍」の記憶を伝える造形物であり、二面的な記憶を想起させる。一方は原爆投下という「社会的な出来事」と原爆による「集団的で匿名の死者」の記憶であり、もう一方は近親者など「顔の分かる死者」の記憶である。本稿では、原爆災禍と集団的な原爆死者の記憶を想起させる役割を「モニュメント」、個人的な死者の記憶を想起させる役割を「墓標」と定義し、爆心地の公園に建立された観音像の分析を行う。

墓地とも関わりの深い仏像は、家族や友人など顔を思い出すことのできる死者を記憶し、慰霊するために立てられることが多く、「墓標」としての役割が強いが、仏像の中でも観音像は、近代的な思想の中で神聖化された「母性」の象徴とされることでモニュメンタルな意味を持つことがある。近代的な「母性」の象徴としての観音は、「軍国主義」に対して「新しい国家」のアレゴリーとして捉えられ、「平和」の象徴となった。つまり観音像には、「墓標」と「モニュメント」双方の意味が内在されているのである。

原爆によって一瞬にして焼け野原となった広島と長崎の爆心地付近は公園として整備され、毎年8月には大規模な平和記念式典が行われている。行政によって作られた公園は、原爆災禍の記憶を伝える巨大な「モニュメント」ともいえる。しかし、公園となっている場所は、多くの人々の命が失われた場所であり、式典が行われる日は彼らの命日である。

式典当日、公園内の観音像の参拝者から聞き取り調査をおこなった結果、観音像によって原爆で亡くなった親族の記憶や、かつての暮らしの記憶が思い出されていることが明らかになった。公園という公共空間の観音像も、その場所の記憶や遺骨との関係性によって、個人的な死者の記憶を想起させる「墓標」の意味を含んでいる。しかし、碑文によって説明を行なう「原爆碑」とは異なり、観音像のもつ意味は変化しやすいため、対面的な死者の記憶をもつ人間がいなくなった時、その意味が変化すると考えられる。

キーワード：観音、母性、記憶、原爆死者、モニュメント、墓標

はじめに

1. 原爆の記憶

1.1 「モニュメント」と「墓標」

1.2 観音のイメージと「母性」

1.3 原爆の記憶と観音像

2. 広島平和記念公園の観音像

2.1 中島本町と「平和乃観音像」

2.2 失われた町と家族の記憶

2.3 公共の空間における個人の記憶

3. 長崎市原爆無縁死没者追悼祈念堂の観音像

3.1 納骨堂の本尊としての「聖観音像」

3.2 新たな祈念堂と観音像

3.3 隠された「聖観音像」

おわりに

はじめに

「広島・長崎」¹⁾ 二つの被爆地は、「怒りの広島・祈りの長崎」という対照的なイメージによって語られてきた。地理的には、市街地の中心部に原爆が投下された広島に対して、長崎は中心街とは丘陵で遮られた浦上に原爆が投下されたという差異がある。浦上は隠れキリシタンが迫害されていた場所であり、近代以降も刑務所が作られるなど旧市街と隔離された地域であった。長崎の原爆災禍は、永井隆に代表されるカトリシズム的な語りによって理解されることが多く、それは安芸門徒のイメージと対照的象徴とされてきた。広島と長崎は、被爆体験を共有しているが、原爆に対する議論が生み出される力学が異なり（福間 2011: 408）、同じ「被爆地」であるが、ひとつの視点から論じることは難しい。

しかし二つの爆心地周辺は、広島市が「広島平和記念公園」に、長崎市は「平和公園」として整備され²⁾、原爆が投下された8月6日には「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」、8月9日には「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が公園内で開催されている。地理的には異なるが、二つの公園付近は原爆資料館や追悼施設、そして緑地の中に多くの碑や彫刻が建立されており、ランドスケープデザインは類似する点も多い。

広島・長崎の爆心地周辺は公園として整備されることで、社会的共同体のメモリアルな遺産を象徴する場となっている。さらに公園内に建立された慰霊碑や彫刻などの造形物（以下、原

爆碑と総称する）もまた、原爆災禍と原爆死者の記憶を想起させる場を作り出している。原爆の記憶を伝える原爆碑の中には類似する形状も多く、観音像も複数の事例が確認されている（表を参照）。本稿では、原爆死者の慰霊や原爆災禍からの復興を願って建立された観音像の特長を分析する。後述するように、近代における観音は、その「母性」的イメージによって、社会的共同体を意識させる。原爆の記憶を伝える公園に建立された観音像は、どのような役割を担っているのか、広島・長崎での調査から検討を行う。

1. 原爆の記憶

1.1 「モニュメント」と「墓標」

近年、戦死者・戦争犠牲者に対する慰霊・追悼の問題は、戦争の記憶と歴史の描かれ方、記念碑や記念式典などを含む表象の問題とされ、個人的な戦争や戦死者の記憶が、どのようにして集合的な記憶に発展するのか論じられている（赤澤 2003: 117）。広島・長崎に対する原爆の投下は、死者の明確な数が分からないほど惨烈なものであった³⁾。原爆の記憶は、その体験者だけが理解できる意味を持ち、個人的な死者との関係も、原爆という「大きな悲劇」の中で集合的記憶を形成する要素となっている⁴⁾。

毎年、式典が行われる広島の平和記念公園は、「広島平和記念資料館」、「広島平和都市記念碑」、「平和の灯」、「原爆ドーム」へと直線的に続くランドスケープデザインによって訪れる人々に原

表 原爆犠牲者慰霊の観音像

名称	建立年	素材・像容	建立場所	管理者	発願者	作者	特記事項
慈母観音像 (※現存せず)	1954	陶・水瓶、童子	廿日市宮島町 大願寺	大願寺	原水爆禁止宮島協議会	地元の陶芸家	台風の影響で破損、1994年に同じ場所に「平和観音」が建立された。
中島本町町民慰霊碑	1956	ブロンズ・蓮華	広島市中区 広島平和記念公園	広島市	中島本町会、旧住民	荒井秀山	発願理由は無くなった町への惜別の情とされる。
聖観音像	1957	ブロンズ	長崎市岡町 原子爆弾無縁死没者追悼祈念堂	長崎市	10名の発起人		かつて、納骨堂の本尊として屋根の上に建立されていたが、現在は地下に移動している。
千手観音像	1958	木・塗装	長崎市岡町 原子爆弾無縁死没者追悼祈念堂	長崎市	熊本郵便局		ガラスケースの中に納められている
慈母の像(慈母碑)	1961	石・水瓶、童子	広島市中区 平和大通り緑地帯	広島市	高ノブ(元マルタカ子供百貨店経営者)	竹内麻夫	百貨店の跡地に建立。
鷲峯平和観音	1966	コンクリート・合掌	北九州市小倉南区 児童公園内		市民有志	小森紫虹	元高射砲陣地の観音像であるが、現在は長崎に祈っていると伝承されている。
観音像3体(宇品地区町民原爆犠牲者慰霊碑のうち)	1966以降	ブロンズ	広島市南区 浜田産業駐車場	浜田産業	浜田一(浜田産業会長)		親鸞像の「原爆犠牲者慰霊の像」を中心に、3体の観音像の他、仏像、彫刻などが安置されている。
被爆動員学徒慰霊観音像	1966	ブロンズ・蓮華	広島市中区 平和大橋東詰		市内21校旧制中学校・女学校生徒遺族有志	砂原放光	台座には、氏名が分かった約4000人の被爆動員学徒の名前が納められている。
観音像(「大野陸軍病院供養塔」の横に建立)	1967	石	廿日市市大野 洗心園(老人ホーム)		四田増五郎、育子		「供養塔」は1945年に建立されたもの、プレスコーダのためか原爆という表記はない。
大木茂平和祈願観音	1968	石・レリーフ	広島市西区 三滝寺	三滝寺	大木茂(原爆ドームを描いた画家)	大木茂	
観音像(「牛田供養塔」の横に建立)	1970	ブロンズ・蓮華	広島市東区 牛田公園				「牛田供養塔」は、地域の死没者760名の慰霊碑であり1950年に建立された。
十一面観音立像(「犠牲者無縁之慰霊塔」の上に建立)	1974	ブロンズ・水瓶、数珠	明石市上ノ丸 大聖寺	大聖寺	日康上人(第22世住職)		明石市被爆者、無縁仏慰霊納骨慰霊塔の上に設置。

被爆者慰霊塔長崎新聞少年	1974	石・経巻	長崎市寺町	浄安寺	浄安寺	松尾三郎（新聞販売店を経営）		原爆の犠牲となった新聞配達少年を慰霊するために建立された。
千田町一丁目民慰霊碑（ふりかえりの塔）	1977	石・振りかえる姿	広島市中区 差点	鷹野橋交		広島市千田町一丁目 原爆慰霊碑建設委員会		
平和観音菩薩	1977	石・合掌	長崎市江里町 門前	明練寺		真照寺（中山身語正宗）の住職		「原爆犠牲者の佛告による世界万民の恒久平和を願う姿とされる。」
平和観世音菩薩像	1978	アルミニウム	広島市中区 中央図書館	広島市立	広島市	寄贈者として70名の個人と団体、発起人として4名の個人。	北村西望	
観音像（原爆供養合同歌碑横）	1978	石・蓮華	広島市西区	三滝寺	三滝寺	山本康夫（長崎出身の歌人）		碑文「祈 原水爆反対 反核の叫び 世界え 蟬時雨 寂笑坊 平和開顕」。
万国霊廟長崎観音	1979	アルミニウム・ 亀座、水瓶、童子	長崎市筑後町	福濟寺	福濟寺	三浦実道	長谷川栄	霊廟の内には「原爆供養碑」と「鉄兜の慰霊碑」、中央にフォーコーの振り子を設置。
折鶴観音	1986	石・合掌	廿日市市原	極楽寺	極楽寺	折鶴観音建立の会		
平和観音	1986	石・合掌	広島市南区 和養老館（老人ホーム）	似島 平	平和養 老館	向井佐歳（平和養老館初代理事長）・浜田一（浜田産業会長）		周囲に「原爆被爆者診療の地の碑」、「三界萬霊塔」、「広島平和養老館慰霊碑」、「平和地藏尊」。
平和観音	1986	石	廿日市市原	大心寺	大心寺	内山妙恵（住職の母）		近年、「ベット観音」と呼ばれる。
観音像	1986	木・水瓶	長崎市岡町	原子爆弾 無縁死没者追悼祈念堂	長崎市	大阪府の個人		ガラスケースの中に納められている。
観音像	1988	石	広島市西区	三滝寺	三滝寺	土屋時子（原爆関連の舞台に出演した俳優）		
平和観音	1994	石・座像、蓮華	廿日市宮島町	大願寺	大願寺	平和観音建立実行委員会		周囲に六地藏像。
十一面観世音菩薩	2001	寄木・水瓶、厨子入	広島市佐伯区 観音寺	坪井町	観音寺	石賀悟山（仏師）	石賀悟山	仏師が発願し寄贈。

爆の記憶を想起させる場所となっている。一方、長崎の「平和公園（願いのゾーン）」は、各国から贈られた平和のシンボル像を周囲に配した「平和の泉」の先に「平和祈念像」が建てられ、広島同様に直線的なランドスケープデザインとなっており、毎年、その中央で式典が行われている。さらに地形的に高低差はあるが、爆心地付近は「祈りのゾーン」、「長崎原爆資料館」のある場所は「学びのゾーン」として「平和公園」の一部となっている。このように広島・長崎の爆心地付近は、公園として整備されることで、原爆災禍の記憶を伝える巨大な「モニュメント」としての役割を担っている。さらに2002年には「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館」が、2003年には「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」が開館し、国によって原爆死者を慰霊・追悼するための空間が公園内に用意された。

関沢まゆみは、戦争の記憶には「死者の記憶」と「事件の記憶」があり、個人化される死者の記憶と表象は死者への追悼・慰霊としてあらわれ、社会化される事件の記憶は戦争への反省と懺悔を意識化すると述べている。日本では「安らかに眠ってください」という言葉に代表されるように、集団的な「死者の記憶」が重視されているとしている（関沢 2008: 7）。広島の平和記念資料館と長崎原爆資料館は「原爆災禍の記憶」を伝えることを重視し、原爆に反対し平和の実現を強く呼びかけていたのに対して、新たな「平和祈念館」は「原爆死者」の記憶を重視し、追悼を行う場となっている。

小松和彦は、「死者のたましい」とは、「死者についての記憶」と置き換え可能なものではないかという仮説を提示し、「死者についての記憶」を保持し続けようとする人がいる限り、死者の「たましい」も存続し続けるのではないかと述べている（小松 2002: 110-111）。記憶は常に忘却と共にある、「死者についての記憶」が忘却される時、「死者のたましい」も消えていく。小松の言葉を借りるのであれば原爆死者の「たましい」

を残すため、「原爆災禍の記憶」を伝えるだけでなく、追悼施設を建設し「原爆死者の記憶」の留めようとするのである。

大型の施設だけでなく、公園内に建立された個々の原爆碑の碑文にも、死者を慰霊する言葉と平和な世界を目指す言葉が混在し⁵⁾、「原爆災禍の記憶」と「原爆死者の記憶」を留める双方の役割を担っている。

さらに国の追悼施設とは異なり、原爆碑の中には特定の死者を慰霊する言葉が多く刻まれている。今井信雄は、阪神淡路大震災の震災モニュメントを分析し、名前や顔の分かる死者を「対面関係の死」という言葉で説明している。今井は、身近な人の死という「対面関係」のネットワークが「その世界に内属する視点」に拘束され、「非対面関係」のネットワークが「俯瞰する位置」をもちうる「特別な死」によって、ひとつの結合された共同体として感覚されると述べている。阪神淡路大震災の事例から、モニュメントによって個々の死者の記憶のつながりが、新しい社会を構築するひとつの要素となっていることが明らかにされている（今井 2001: 414-416; 2006: 280-281）。

原爆投下から70年近い歳月が経過した広島・長崎では、すでに新しい社会が構築されたと言えるが、現在も、原爆碑は、原爆の社会的な記憶や集団的な原爆死者の記憶を想起させるものである。では、新しい社会が構築された後も、これらの原爆碑は、「対面関係」の死者の記憶を想起させるものとなりうるのであろうか。

広島の平和記念公園内に建立された「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」⁶⁾は、原爆犠牲者である朝鮮の王族を中心に、「韓国・朝鮮人の被爆」という民族の集合的記憶の「モニュメント」である。松田素二は、慰霊碑や被爆者健康手帳の問題が、多様で差異に満ちた朝鮮人被爆者の記憶語りを集合的な物語へと変容させ、標準化されていったと論じている（松田 2009: 265-266）。他方で西井麻里奈は、この碑そのものが、集合的に特

定のエスニック集団を慰霊する場としての公共性を備えているとしても、時に特定の死者と合一し、その死の状況によっては極めて具体的に碑は個人の「墓」になり得るのかもしれないと論じている（西井 2013: 80）。

個人的な死者の記憶も、大きな原爆災禍という出来事の中で想起されるため、社会的な原爆の記憶と集団的な原爆死者の記憶を想起させると同時に、対面的で顔の見える死者の記憶を想起させる役割が一つの原爆碑の中に内在されている。広島・長崎の公園自体は、特定の死者を想起させるものではないが、個々の碑の中には特定の死者の記憶を想起させるものがある。すでに新しい社会が構築され、集合的記憶の場として公園と原爆の記憶が結びついた広島・長崎において、「対面的な原爆死者」の記憶がどのように想起されるのか検討する必要があるのではないだろうか。

「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」の事例からも明らかになったように、ひとつの原爆碑の中に「原爆災禍の記憶」と関連付けられた非対面的、集団的な「原爆死者の記憶」と、家族や友人のような対面的、個人的な「原爆死者の記憶」を想起させる役割が内包されている。本稿では、原爆投下という「社会的な事件」、原爆による「集団的で匿名の死者」の記憶を想起させる役割を「モニュメント」と定義し、「対面的な死者」の記憶を想起させる役割を「墓標」と定義する。そして行政主体で作られた公園の中で、観音像によって想起される記憶の分析し、これまで十分に検討がなされてこなかった原爆碑の「墓標」としての役割を明らかにする。

1.2 観音のイメージと「母性」

公的な場所である広島・長崎の公園では、「平和祈念館」に代表されるように死者の追悼においても非宗教的な表象が用いられる。このような空間の中で、宗教的な表象である観音像は特異な存在であるといえるが、観音像は、近代的

な「母性」イメージによって公園内に建立されることになったと推測される。

観音は本来、性別がないとされるが、その起源から母神・女神的な特性が指摘されている（沼 1979, 1990）。説話の世界では、多くの応身をもつ観音は女性の姿で現れることが多く、近世以降になると、観音の慈悲心を、「母」として捉える「慈母観音」や「子安観音」の信仰が広がり、女性的な造形で表現される観音像も多く制作されるようになった（岩崎 2009: 4-5）。さらに観音像は近代的な「母性」の中に位置づけられている。

千葉慶は、近代における「母性」イメージと観音の関係性を以下のように説明している。近代における新しい「母性」イメージは、マリアを規範とするキリスト教の女性イメージに強く影響されるものであったが、キリスト教は「仮想敵」的な存在でありつづけたため、宗教性を脱色した「良妻賢母」として普及することになったとしている。やがて脱宗教化されたことで、マリアに基づく新しい「母性」イメージを、旧来の「母性」シンボルだった観音のイメージによって上書きするようになった。

1910年代以降は、国家を超え、あらゆる宗教の信者に訴える絶対的な信仰の対象として、宗教的シンボルが融合し神聖化された「母性」イメージを作り出した。戦時期、神聖化された「母性」は、天皇制国家の最高権威である天皇の皇祖としてのアマテラスのイメージによって染め上げられる。神聖化された「母性」は、敗戦とともに天皇・アマテラスの文脈がうすれた（千葉 2006, 2008）。観音は、古くからの信仰が続けられる一方で、近代的な「母性」イメージによって、仏教の信仰を超え、神聖化された「母性」を象徴するものとなったのである。

若桑みどりは、戦争というグラウンドに男女を置くと、典型的役割は、「よき兵士」と「よき母親」という対照的イメージとなって浮かびあがってくるとしている。「兵士・母親」という

イメージは、「殺す・産む」、「死・生命」、「戦争・平和」という対のイメージをひとつのコンテクストに取り込み、最終的に「母性」は、戦争にともなう大量の死の心理的補完物として、また母なる血によって結び付けられた一家族という国民統合の精神的象徴になったとしている（若桑 2000: 50-60）。

広島・長崎の原爆に関連する彫刻は、「母子像」、「こども像」、「女性像」を中心に建立することで、軍事都市としての役割を隠匿し、悲惨さを乗り越えて、平和を祈り、復興に励んできた日本の自己イメージが投影されていると指摘されている（手塚 2003: 82-83）。その中でも「母子像」は、軍国主義に対として新たな国家のイメージを投影するものであった。

米山リサは、被爆者運動の中心的な人物が計画した原爆碑に対して、戦前・戦中の軍国主義の男性像と、戦後の新生国家のアレゴリーとなる慈母観音を対照とし、子供によって母の育てる未来を体現するという象徴主義は、父親の像から母なる観音像を経て、男の子へと移っていく想像上の動きによって国民史の直線性を示していると述べている（米山 2005: 255-257）。近代的な核家族像によって戦前から戦後への流れを表し、その中で「母性」的な観音像は、新たな国家を生み出す役割を担うものとされたのである。

千葉は、戦争末期、アメリカ軍が日本の降伏を呼びかけるために撒いたビラに、狩野芳崖の「悲母観音」の画像と「名誉ある平和」という文字が書かれていたことに着目し、「母性」と「観音」は終戦を待たずして「平和」のイメージに転向を果たしたと述べている（千葉 2008: 53）。岡倉天心の影響もあり、「悲母観音」は近代的母性のイメージとして広く普及した図像である（清水 2004）（千葉 2006）。近代において最も知られた母なる観音像である「悲母観音」が、戦時期から既に「平和」の象徴するものと捉えられていたことは、戦後の観音像のイメージに大きな

影響を与えたと予想される。

非軍事的な存在として、近代的な「母性」としての観音のイメージと、「母性」によって裏打ちされた「平和」の象徴としての観音は、戦争死者を慰霊する観音像に多く用いられる「平和観音」という名称にも反映されている。このように観音は、近代的な文脈の中で新たな意味を与えられることで「平和」を象徴する存在となり、非対面的、集団的な「原爆死者の記憶」を想起せる「モニュメント」としての役割が他の仏像以上に強いと言える。このような観音像の特徴を示すものとして、原爆とは関係のない観音像が、社会化された原爆の記憶によって、新たな原爆の「モニュメント」となった事例をあげる。

1945年8月9日、原爆投下の第一目標は小倉市（現、北九州市）、第二目標が長崎市であった。小倉の鷲峰山山頂に作られた児童公園には、17メートルの「鷲峰山平和観音」⁷⁾が建立されている。公園に子供と遊びに来る母親は「あの観音様は長崎の方を向いて祈っている」と教えている。原爆の第一目標であった因果を知った小倉の人々は原爆死者慰霊の観音像として語り継いできた⁸⁾。

実際には「鷲峰山平和観音」は、長崎とは反対の北東を向いており、原爆とは関係なく建立された観音像であるが⁹⁾、「原爆」に対する共通の記憶によって、観音像は長崎の非対面的な多数の死者を慰霊する「モニュメント」へと変容したのである。

「鷲峰山平和観音」が公共空間である公園に建立されたことも、「平和」の象徴としての観音像を強調し、社会化された原爆災禍の記憶を伝える「モニュメント」としての役割を強調している。観音像は、仏教寺院など伝統仏教の空間と切り離されたとき、社会化された原爆の記憶を伝える「モニュメント」としての役割が強くなるため、広島・長崎の公園内の観音像も「モニュメント」としての役割あるものと考えられる。

1.3 原爆の記憶と観音像

原爆犠牲者慰霊のために建立された観音像の中には、近代的「母性」のイメージとして広く普及した「悲母観音」と同じく、水瓶の水を足元の童子へ与える構図をとるものがある。長崎市・福濟寺の「長崎観音」¹⁰⁾、広島市・平和大通りの「慈母の像」¹¹⁾、そして現在は残されていないが廿日市市・大願寺の「慈母観音」¹²⁾である。水を与える慈母観音の姿は、水を求めながら亡くなっていった原爆犠牲者を供養すると同時に¹³⁾、「悲母観音」同様に、「母性」というイメージから「平和」を象徴する原爆碑となっている。

平和大通りの「慈母の像」の台座には「平和乃鳩を はなち給う」と書かれ、文字テキストによって平和を願う「モニュメント」としての役割が示されている。さらに石碑には「子をひとり 焔の中に とりのこし 我ればかり得たる命と 女泣き狂ふ」と原爆歌人・正田篠枝の歌が刻まれている。この歌は、原爆によって亡くなった多数の死者に向けた思いを伝えると同時に、子供を原爆によって亡くした発願者の個人的な死者への思いを伝えている（宅和 1996: 224）。発願者にとって「慈母の像」は、対面的な死者の記憶を想起させる「墓標」でもあったと予想されるが、碑文がなければ、その意味を他者が共有することは出来ない。

観音像をはじめとした造形物などの視覚表象は、集合的記憶を普及させるうえで重要な役割をはたしている。視覚表象のインパクトを文字テキストで伝達するのは難しく、言葉で説明されるよりも容易に理解できる場合も多い。しかし文字テキストと比べて、視覚表象は解釈の多様性を生みやすく、視覚表象に対して異なった意味付けを行うことも容易である。意味の変容を防ぐためには、視覚表象と文字テキストを併用し、解釈を意図した方向へ導くことが行われる（森村 2006: 29-30）。

観音像など碑文を主体としない原爆記念碑・

慰霊碑も、碑文や説明文を加えることによって、原爆の記憶を具体的に伝えることが可能である。換言すれば、文字テキストで説明されていない観音像は、原爆の記憶と切り離され、異なる意味付けが可能である。たとえば廿日市市の大心寺の「平和観音」は、住職の母が自らの被爆体験から1986年に建立したものであるが、両手で猫を抱き、足元には2匹の犬が座っている姿から、近年は「ペット観音」と呼ばれ、ペットの長寿や成仏を願う人々が訪れている¹⁴⁾。古くからの信仰対象であった観音などの仏像は、文字テキスト併用し解釈を意図した方向へ導かない限り、意味が変容しやすい造形物であるといえる。

30年が経過する前に観音像の意味が変容するのであれば、広島・長崎において戦後建立された碑文のない観音像の中に、原爆死者を慰霊するために建立されたものがあつたとしても、月日が経過する中で、すでに他の習俗の中に埋没している可能性も考えられる。

特定の死者に対する供養を行なう観音像であれば、記憶を有する家族や地域という小集団の集合的記憶の中で、観音像と原爆が結びつけられるため、碑文は併用されなくとも原爆碑の役割を担う。特定の個人の死者を慰霊する碑文のない観音像は、「モニュメント」以上に「墓標」としての役割が大きいものであが、共通の死者の記憶を持つ集団以外には、観音が「墓標」とあると認識されることはない。それは地藏など他の仏像も同様であろう。

広島市の三瀧寺には約500体の石仏があり、「大木茂平和祈願観音」や「原爆供養合同歌碑」の横に建立された観音像など、碑文によって説明された石仏は、原爆の記憶を伝えている。しかし無数の石仏の中に原爆の死者を供養するために建立されたものがあつたとしても、文字テキストを伴わなければ、室町時代から近代までに建立された様々な石仏のひとつとして認識され、原爆死者の記憶を想起するものにはならない。碑文のない仏像は、個人的な死者の記憶をもつ

ものがいなくなり「墓標」としての役割を終えたとき、原爆の記憶と切り離され、個別の由来や利益を、個人が自由に意味づけを行うことが可能になる。

観音像は、伝統的な仏教の文脈や民間信仰の対象として「墓標」としての役割をもつものが多いと推測される。また寺院に建立された観音像においても、公園に建立された観音像同様に平和の象徴としての「モニュメント」としての役割を担うこともあるだろう。しかし、碑文など文字テキストによる説明がない限り、その実体を知る事は難しい。そのため次章では、関係者から聞き取りを行い、観音像の具体的な「墓標」としての役割を明らかにする。

2. 広島平和記念公園の観音像

本章では、広島市の平和記念公園内に建立された「平和乃観音像」についての聞き取り調査を中心に論じる。

2.1 中島本町と「平和乃観音像」

8月6日、大規模な平和祈念式典が行われている広島市の平和記念公園は、太田川の分流が形作るデルタの中にあり、公園の玄関口にあたる南端には平和大通りが走る。平和記念公園の北側には「ヒロシマ」のシンボル原爆ドームが見える。原爆ドームの東側が爆心地であり、爆心地から半径500メートル以内の建築物の大半は一瞬にして破壊された。

平和記念公園内に建立された「平和乃観音像」は、爆心地から最も近い（約300メートル）場所に建立された観音像である。この観音像の台座背面には「嗚呼、中島本町の跡…」と書かれ、横に設置された「中島本町町民慰霊碑」には以下のように刻まれている。

この地は明治・大正・昭和の初期広島で最も繁華の中心であった
昭和20年8月6日原爆一円町民全員一瞬にして

悲惨なる最後をとげたり

生き残れる有志相集って平和観音像を建立し
永遠にその霊を慰む

毎年8月6日午前9時より平和観音前に於て慰霊
祭を執行いたしますので多数ご参詣下さい

平和記念公園の「広島平和都市記念碑（通称・原爆慰霊碑）」から北側は、かつて中島本町と呼ばれ市内有数の繁華街として栄えていた。中島本町から伸びる相生橋は、広島に数ある橋のなかでも珍しいT字型の橋であったことから、原爆搭載機B29の目視投下の目標となった（宅和1996: 152-153）。ほぼ爆心直下となった中島本町の町並みは一瞬にして壊滅し、地下室で作業をしていた1名をのぞき、8月6日、町内にいた全ての住民が亡くなった。あまりにも大きな被害であった為、原爆が投下された当日の町の状況を知ることは難しい。

戦後、戦災復興都市計画で中島本町は公園予定地に決定し、他の地域に出ている助かった住民は、転居を余儀なくされた。中島本町には町有財産に借家があり、その土地も代替地をもらったが、旧町民は別々の場所へ転居することになった為、代替の共有地は不要となった。

中島本町の世話役数名で相談を行い、代替地を売った代金で、町があった場所が忘れられることがないように記念するものを作ることに決定した。そして市と交渉して公園内の町の跡地に記念碑を建てることが許可された。既に散らばっていた元住民一人一人を訪ねて80万円以上の寄附を集め、町有財産を処分した30万円を合わせた120万円の資金によって記念碑が作られることになった。

どのような形状の碑を建立するのか役員で相談を重ねた結果、慰霊のために仏教の宗派を問わない観音像を建立することに決定した。しかし、公園内に宗教施設は作らないという市の条例があるため、市から反対意見が出された。親戚が中島本町で全滅した当時の市長である渡辺

忠雄の「何かしるしに建てるのはよからう」という声も後押し、最終的に、彫刻家荒井秀山が制作した「平和乃観音像」という名前の「芸術作品」として市から承認を得て、公園の管理者である広島市に寄贈された（黒川編 1982: 43-45）（水田 1993: 80-83）。

「平和乃観音像」の横には、中島本町の復元図と、中島本町で亡くなった438名の名前が刻まれた「原爆死没者名碑」を設置し、親・子・孫を象徴する3本のクスノキを植えて平和の祈りを込めた。1956年8月6日の除幕式には200人余りが参加し、読経、焼香のあと思い出話を語り合った。

2.2 失われた町と家族の記憶

毎年、8月6日には「平和乃観音像」の前で慰霊祭が行われている。慰霊祭で読経を行っているのは、浄宝寺（浄土真宗）の住職・諏訪了我である。かつての中島本町には浄宝寺と慈仙寺、ふたつの寺院があった。爆風で崩壊した慈仙寺の五輪塔は、現在も原爆投下後の姿で平和記念公園内に記念碑として残され、そこに寺院があった記録となっている。しかし「広島平和都市記念碑」の西側10メートルほどの場所に、浄宝寺があったことを示すものは「平和乃観音像」横に設置された復元地図のみである。

原爆が投下される前の浄宝寺周辺は、商店や映画館、民家が軒を連ねた。寺にはピアノが置かれ、劇が演じられ、華道や茶道を楽しむ人が訪れる文化センターのような場所であった。原爆投下によって、両親と姉は被爆死し、学童疎開をしていた諏訪だけが助かった。原爆投下から40日後に中島本町に戻った諏訪の目の前には焼け野原が広がり、寺は瓦礫だけが残り、墓石も崩れていた。

中学校に数珠と経本を持参し、帰りに門徒宅に寄ってお参りをしながら寺の再建を目指した。元の中島本町の場所は公園として整備されることが決定し、換地として得た南東に約500メートル移った大手町に、1953年、門徒の協力を得て、

寺を再建することができた。諏訪は帰ることの出来なかった町の寺院と家族を思い出しながら「平和乃観音像」の前で毎年読経を行っているという¹⁵⁾。

現在、中島平和観音会会長である福島和男の実家は、料亭旅館「福亀」を営んでいた。「福亀」の座敷の目の前には元安川が流れ、その向こう側にモダンな広島産業奨励館（現・原爆ドーム）が見えることが自慢だった。8月6日、学徒動員で己斐の工場にいた福島は、爆風で半壊した建物から逃げ出し助かった。自宅「福亀」に戻ることができたのは8月10日になってからである。

自宅には、祖父母、両親、叔母、姉の家族6人がいたが、そこは焼け野原になっていた。自宅の厨房付近に誰のものか分からない遺骨があったので持ち帰ったが、全員の遺骨を見つけることはできなかった。家族全員を失った福島は、焼け野原に土を盛って造成した平和記念公園の下に、家族の骨が埋まっているという意識を常にもっているという¹⁶⁾。

「平和乃観音像」が建立され、旧中島本町の慰霊祭が行われるようになってから、8月6日は叔母と共に必ず平和記念公園を訪れるようになった。しかし平和記念公園を訪れると、失われた自宅や公園の下で眠る家族のことなど辛い記憶がよみがえるので嫌であった。平和記念公園横に社屋がある中国新聞社に就職したことで、平和記念公園を通る苦痛は少し薄れるようになり、毎日、出勤前には「平和乃観音像」に手を合わせるようになった。福島は、被爆体験の語り部をやらないのかと誘われたこともあったが、在りし日の中島本町を語るのであれば構わないが、原爆投下後の様子を語る事は、辛い出来事を思い出すことになるので、語り部をやることはなかった。

2.3 公共の空間における個人の記憶

諏訪と福島が記憶したいと願ったものは、原爆が投下される以前の中島本町である。彼ら

にとって平和記念公園は、原爆で亡くなった親族と暮らした場所である。広島で最も社会化された「原爆の記憶」を伝える場所である平和記念公園は、かつてそこに暮らした住民の個人的な記憶を「平和乃観音像」一体に集約させた。「平和乃観音像」は、観音のもつ仏教的信仰から中島本町で亡くなった町民を慰霊することを目的としていたが、原爆で町民の大半を失い、町名さえ残らなかった「失われた町」があったことを、そしてその町で生活した人間がいたことを伝えている唯一の「モニュメント」となっている。

筆者は2014年8月6日に平和記念公園を訪れた。国の主催で、来賓が多数列席する「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」が行われ、平和記念公園には多数の人々が集まり、公園の周囲はデモ隊や警察官の声が響き、騒がしい雰囲気であった。式典会場の僅か数10メートル横で旧中島本町の慰霊祭が始まり、「平和乃観音像」の前で読経が行われている最中、公園内には平和記念式典の規制退場のアナウンスが流れていた。匿名の人類の悲願としての「平和」を代弁する大掛かりな式典は、個人化された原爆にまつわる記憶を隠蔽していく。テレビ中継によって全国に伝えられる巨大な式典の直ぐ横では、親族が亡くなった場所、そして現在も親族が眠る場所で慰霊祭を行っている人々がいる。彼らにとって式典の行われた日は、親族の命日である。

観光客をはじめとした公園を訪れる多くの者にとって、非宗教的、汎社会的な「原爆災禍」を記憶する平和記念公園の中で「平和乃観音像」は、公園という集合的記憶の場を構成する要素として「モニュメント」としての役割を担っている。しかし、かつて中島本町に暮らした者にとって、「平和乃観音像」は、遺骨さえみつけることの出来なかった親族の「墓標」として、顔の思いだされる死者の記憶を留めると同時に、一瞬で消えた町にまつわる個人的な記憶を想起させる「墓標」ともなるものであった。

3. 長崎市原爆無縁死没者追悼祈念堂の観音像

長崎市の平和公園の一角に、原爆によって亡くなった身元や氏名不詳の遺骨、氏名がわかっても引き取り手がない原爆無縁死没者の遺骨を安置している場所がある。かつて「原子爆弾死没者慰霊納骨堂」（以下、納骨堂）であった施設は、現在「長崎市原爆無縁死没者追悼祈念堂」（以下、祈念堂）となっている。この祈念堂には数体の観音像が安置されている。本章では、かつて納骨堂の本尊であった「聖観音像」を中心に観音像をめぐる記憶の問題を論じる。

3.1 納骨堂の本尊としての「聖観音像」

納骨堂が建立されるまでのいきさつは複雑である。駒場町で爆心地付近に散在していた多数の原爆死者の遺骨を町の空き地に集め、百ヵ日法要をいとなみ、花を供えて犠牲者の冥福を祈った。そして1947年、駒場町に供養碑と納骨堂が作られた。長崎市の調査により、駒場町以外にも無縁仏の遺骨が各地の共同墓地等に多数埋葬されていることが判明し、民生委員協議会と共同で引き取った。市民の浄財で岡町に土地が購入され、その寄贈を受けた長崎市は1959年に納骨堂を建立し、その中に遺骨を安置し民生委員によって管理が行われるようになった。

1975年、長崎市民生児童委員協議会と長崎市原爆殉難者無縁仏慰霊奉賛会によって設置された看板には「本会はさきに収集した原爆殉難無縁遺骨七千余柱をここに安置し観音像を本尊として年々祭祀を行いその冥福を祈ってきた」と記されている。この本尊の観音像とは、納骨堂の屋根の上に安置されていたブロンズ製の「聖観音像」である。この観音像は1957年10名の発起人によって建立されたものである。当時、納骨堂の建物左壁面には「聖観音像建立のことば」が書かれていた。

昭和二十年八月九日原子爆弾がこの浦上原頭

に炸裂し、地上に在る家屋も草木も無惨に叩き潰されまた七萬三千八百余の尊い人命が悲壮な爆死を遂げたあの地獄図絵にも似た悲惨事はまことに痛恨に堪えない。

十三回忌を迎えるに当り、これを機縁として今まで市内及び近郊に散在していた御遺骨を茲に収納すると共に被爆殉難者の御霊を懇ろにお弔いする趣旨をもって聖観音を建立した次第である。

われわれはこの観音像を通じて御霊を慰め且つ平和への誓いを新たにすものである。

昭和三十二年八月九日¹⁷⁾

屋上に建立された納骨堂の本尊である「聖観音像」は、原爆の犠牲者を供養することが期待されていた。屋根の上の観音だけでなく、納骨堂の中にも仏像、位牌、経典が納められ、仏教者によって慰霊祭が行われた。無縁仏という匿名の多数の死者の遺骨を集めた納骨堂は、原爆災禍という社会化された記憶を伝える場であり、納骨堂の上に建立された等身大の「聖観音像」は、無縁仏を含めた全ての原爆犠牲者を慰霊する「モニュメント」としての役割を担うものであった。

3.2 新たな祈念堂と観音像

1992年、平和公園に地下駐車場を建設することになり、納骨堂の場所をかさ上げして平和公園の敷地内に組み込み、1994年に納骨堂の代わりに祈念堂が建設された。平和公園側から見える祈念堂の正面はガラス張りとなっており、内部壁面は金色に塗られ、仏教式の祭壇の上に「原子爆弾無縁死没者追悼之標」と書かれた位牌風の板を中心に、納骨堂時代から安置されていた仏像や軸が飾られている。さらに2013年にはインド首相から長崎市に贈られた仏舎利が安置され、祈念堂内は仏教色の強い空間となっている。堂内には、大阪府の個人が寄贈した「観音像」と熊本郵便局が寄贈した「千手観音像」も安置されているが、本尊であった「聖観音像」に比

べると小型のものである。

ジョン・ネルソンは、祈念堂が納骨堂から建て替えられたことを把握していなかったことから、祈念堂の中に安置された観音像についてのみ論じている。公式には宗教施設ではないとされる祈念堂に観音像が安置されていることは、観音が、超宗派に受容され、すべてを包み込み、母性的であるためだとし、現代の観音信仰が原爆やその被害を表現するのに適していると述べている (Nelson 2002: 152)。西村明は、ネルソンの論文に対して、観音が現代日本において有する多声的性格と、戦後における国家と戦死者慰霊との関係のあいまいさを関連付けて論じる視点は、日本人研究者があえて見ようとしなかった論点ではないかとしながらも、祈念堂は市の主管というより、民生委員たちによる自発的な慰霊行為であった納骨堂の発展形態として捉えるべきであると述べている (西村 2006: 14)。

国が主体となり造った「平和祈念館」が、「原爆死者」の記憶を伝える無宗教的な空間であるのに対して、祈念堂は、寄贈された仏像をはじめ様々な宗教的表象の集積によって、「原爆死者」の記憶を伝える空間を創り出したといえる。この集合的に作られた仏教的イメージもまた、匿名化された不特定多数の原爆死者と原爆災禍を伝える「モニュメント」としての役割をはたしている。

現在、祈念堂内に祀られた仏像は観音だけではないため、観音像だけを取り出して原爆と結びつけることは難しいが、かつて納骨堂の本尊であった「聖観音像」が建物の上に建立され、集団的な死者を想起させる「モニュメント」の役割を担っていたのに対して堂内の観音像は、その祀られ方から、一体のみで「モニュメント」の役割を担うことは難しいであろう。

3.3 隠された「聖観音像」

平和公園の中に視覚的に組み込まれたことにより、祈念堂は建物自体の宗教色を廃すること

になった。屋上に安置されていた「聖観音像」は、納骨堂の由来が示された「駒場町納骨堂」の石碑とともに、階段を下った祈念堂の地下にあたる場所に移動された。現在「聖観音像」が設置されている場所は、公園側から全く見ることが出来ない、ガラスケースの中の仏像とは切り離された空間である。コンクリートの壁とフェンスに囲まれ僅か数十センチの出入口の奥にあり、その場所に気がつく者は少ない。

かつて納骨堂の本尊であった「聖観音像」は、社会的な集合的記憶として原爆災禍を伝える「モニュメント」でもあったが、建て替えによって隠された存在となった。たとえ階段を降り「聖観音像」を見つけたとしても、現在は文字テキストによる説明も付けられていないため、この観音像が建立された理由を知ることは出来ない。「聖観音像」は屋上から地下に移動したことで「モニュメント」としての役割が薄れ、意味が不明確な存在となっている。このような「聖観音像」は、現在どのような役割を担っているのだろうか。

2014年8月9日、長崎市長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典の終了後、式典参加者の多くが祈念堂にも手を合わせていた。しかし「聖観音像」が安置された階段の下まで足を運ぶものは殆どいなかった。数少ない「聖観音像」の参拝者の一人である鶴昭男は、納骨堂内に納められていると思われる母の遺骨のため、毎年8月9日お参りをしているという。

鶴は長崎ではなく広島で原爆を経験している。岩国航空隊の予科練にいた鶴は、8月6日の朝食を終えた直後、原爆投下によって建物が地震のように揺れる体験をした。そして翌日には、爆心地へ入り、その悲惨な様子を目の当たりにしたが、その時は2日後に故郷である長崎に原爆が投下されるとは考えてもみなかった。

長崎に戻ったのは終戦後であった。現在の平和公園の南側周辺で母親は亡くなったと聞き、遺骨を探したが見つかることはなかった。鶴は、

特攻を志願していたが機材不足で飛ぶことができなかった。戦友や周りの人間が次々と亡くなり、自分が死ぬか、周りが死ぬかという精神状態だったので、母親の死を知った時に涙も出なかった。戦後しばらく経ってから母親が自分の代わりに亡くなり、自分は生かされたのだと感じるようになった。

納骨堂が作られてから、身元の分からなかった母の遺骨が、納骨堂（後の祈念堂）に納められているのだと思い、お参りするようになった。長崎市に対して命日にあたる8月9日だけでも祈念堂を開けて、遺骨に直接お参りをしたいと申し入れをしたが、遺骨が安置されている部屋が開放されることはなかった。遺骨は祈念堂の地下に安置されているので、そのすぐ近くに安置された「聖観音像」にお参りをするようになった。観音像に対して深い信仰があるというわけではないが、遺骨の近くの「聖観音像」に参拝すると、母親の「たましい」が観音像にこもっているのではないかと感じるという¹⁸⁾。

鶴のインタビューから、「聖観音像」が、遺骨との関係性や亡くなった場所との距離によって、死者の記憶を想起させる「墓標」としての役割を担っていることが明らかになった。人目につかない場所に隠され、文字テキストによる説明もなく集合的記憶を想起させることが難しいと考えられる現在の「聖観音像」は、鶴のように対面関係の死者の記憶がある者にとっては、「墓標」として重要な意味をもつものとなっているのである。

おわりに

原爆によって一瞬にして焼け野原となった広島と長崎の爆心地付近は、戦後、公園として整備され、大規模な式典が行われている。行政主体で作られた公園は、集合的死者の記憶を不特定多数に伝える巨大な「モニュメント」ともいえるものであった。本稿では非宗教的な空間である公園内に、宗教的造形物である観音像が

建立されていることに着目し、観音像の調査を行った。

原爆死者を慰霊し、原爆災禍の記憶を伝えるため、広島・長崎の公園に建立された観音像は記憶の二面性を想起させるものであった。本稿では原爆投下という「社会的事件」と原爆による「集団的で匿名の死者」の記憶を想起させる役割を「モニュメント」、「個人的で対面的な死者」の記憶を想起させる役割を「墓標」と定義し、分析を行った。二つの役割は、同時に含まれることもあり、また関係する人々の記憶と共に、「墓標」と「モニュメント」、どちらかの役割が強く現れることもあった。

寺院内に建立される仏像は、その伝統的な信仰から「墓標」としての役割が強いものが多いが、観音は近代的な「母性」の文脈の中で、戦後の「新しい国家」や「平和」の象徴として公園など公共空間にも建立された。公共空間に建立された観音像は、社会化された原爆の記憶を伝える「モニュメント」としての役割が強く社会的記憶と集団的死者の記憶を想起させる。

しかし、公園として整備された場所は、多くの人々の命が失われた場所であり、平和記念式典が行われた日は、彼らの命日である。広島・長崎の式典が行われている公園内において、観音像に祈っている人々に聞き取りを行った結果、観音像が原爆によって亡くなった親族の記憶を想起させる場として「墓標」としての役割を果たしていることが明らかになった。そして原爆により遺骨が見つかっていないことも、「墓標」としての役割を強くするものであった。

文字で書かれた記念碑とは異なり観音像のもつ意味は変化しやすく、個人的な死者の記憶をもつ人々がなくなった時、観音像によって想起される記憶は異なるものとなるだろう。しかし、聞き取りの結果から、観音像の表象には文字では表すことのできない記憶を想起させる可能性があるとして予測された。今後は、なぜ観音像でなければならなかったのか、その遠因について

てさらに調査・分析を進めていきたい。

付記

本稿を作成するにあたり以下の方々からご協力いただきました。諏訪了我氏（浄宝寺）、福島和男氏、鶴昭男氏。記して御礼を申し上げます。

注

- 1) 本稿では、原爆投下の順にあわせて「広島・長崎」の表記で統一する。
- 2) 「広島平和記念公園」は1954年4月に開園。長崎市の「平和公園」は1950年8月完成、1955年8月平和祈念像除幕。
- 3) 公益財団法人放射線影響研究所の発表では、被爆から4カ月以内の死亡者数は、広島で9万から16万6千人、長崎で6万から8万人とされる。
- 4) モーリス・アルヴァックス（1989: 93-99）を参照。
- 5) 原爆碑の碑文は、2014年8月に広島・長崎で行った調査、（黒川 1982）、（西尾編 1982, 2000）、（広島県歴史教育者教義委員会編 1984）、（長崎国際文化会館編 1986）、（水田 1993）、（宅和 1996）、（藤田 2011）、「広島平和記念資料館」<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>（2014年8月30日閲覧）、「長崎市」<http://www.city.nagasaki.lg.jp/>（2014年8月30日閲覧）を参照。
- 6) 1970年、韓国原爆犠牲者慰霊碑建立委員会によって建立された高さ5メートルの碑。広島では、数万人にのぼる朝鮮人が被爆したといわれる。碑は、朝鮮王家の一族が原爆被災後に発見された場所に近いという理由から本川橋西詰めに建立された。その後平和記念公園内への移設の要望が出され、広島市と関係者との協議により、1999年、公園内に移設された。
- 7) 地名は「鷲峯山」だが、観音の名前は「鷲峰山」の字があてられている。戦時中、多くの軍需工場がある小倉市街地の防空を目的に、鷲峰山頂上に高射砲陣地が建設されていた。1966年に平和を願って有志の寄付で観音像が建立されたが、台座の下に延命十句観音経の碑がある以外、この観音像の由来は記されていない。
- 8) 小倉上空を漂っていた霞もしくは煙のために、目視による投下目標確認に失敗し、第二目標である長崎に原爆は投下された。1972年から北九州市小倉北区では、長崎市と同時並行で平和祈念式典が行われている。

- 9) 「鷲峰山平和観音」を管理する大興善寺の住職中尾暢宏が子供だった40年前にはすでに「長崎に祈っている」と言われていたという。中尾は「戦没者慰霊の平和観音ですが、特に長崎ということではありません。被爆した方々をいたわる気持ちから出た話ですから、それはそれでいいと私は思っています」と述べている（『読売新聞（東京）』2008年10月6日）。
- 10) 正式名称は「万国霊廟長崎観音」。福濟寺は、1628年に建立された唐寺で、本堂などの建造物は、国宝に指定されていたが、1945年8月9日、原子爆弾投下で伽藍は全て焼失した。1973年、当時の住職であった三浦義光は、長崎の原爆供養塔として観音像を建立することを寺の戦災復興事業にしようと考えた。1979年に完成した「長崎観音」は、亀の形をした霊廟を台座の上に立つ、高さ18メートル、地上から35メートルの巨大な観音像である。
- 11) 「慈母の像」または「慈母碑」と表記されている石製の観音像。マルタカ子供百貨店の経営者、高ノブによって発願された。子供百貨店は原爆によって全壊し、高は夫と子供を亡くした。家族を失った悲しみを忘れないため、百貨店跡地に観音形の慰霊碑を発願し、1961年8月広島市に寄贈した。
- 12) 1954年に発足した原水爆禁止宮島協議会が建立。台座には「原爆戦争犠牲者慰霊 祈願世界平和 原水爆禁止」の碑文を刻んだ陶板がはめこまれ、「原爆許すまじ」の歌詞が刻まれた。建立から30年以上が経過し、陶製の観音像は台風で破損したため、1994年、新しく石造の「平和観音」が建立された（西尾 2000: 120）。
- 13) 右手の酒水器から出される無垢清浄な甘露の水は、水を求めて、求め得ず渇にあえいだまま、不埒の人となった諸精霊への、布施と供養の意味を表している（三浦義光 1973『長崎観音建立趣意書』長崎観音建立奉賛会、pp. 2-3）。
- 14) 大心寺の住職内山弘全の母で僧侶の内山妙恵は、12歳の時に広島市の爆心地から1.4キロ地点で被爆し、両親と弟を失った。さらに被爆直後の町の中で、酷い姿の犬を目の当たりにして「一瞬にして多数の人間と動物の命を奪った原爆の悲劇が二度と繰り返すことなく、人類も動物も恒久的に幸せに暮らせる平和な世が来るように」と願いを込め1986年8月6日に「平和観音」を建立した（『朝日新聞（大阪）』1991年9月26日）。
- 15) 『中国新聞』2010年9月24日、『毎日新聞（東京）』2011年8月6日夕刊及び諏訪了我氏の書簡より。

- 16) 福島（2008）及び、2014年8月6日に行ったインタビュー。
- 17) 碑文は現存していないため、（長崎国際文化会館編 1986: 50-53）を参照した。
- 18) 2014年8月9日に行ったインタビュー及び、鶴の個人ウェブサイト「回顧録スタート塾」（<http://www3.cncm.ne.jp/~startjuk/> 2014年8月30日閲覧）を参照。

参考文献

- 赤澤史朗
2003 「戦後日本における戦没者の「慰霊」と追悼」『立命館大学人文科学研究紀要』82: 117-133。
- アルヴァックス、モーリス
1989 『集合的記憶』小関籐一郎訳、行路社。
- 千葉 慶
2006 「戦争と悲母観音」『Image & gender』6: 15-22。
2008 「マリア・観音・アマテラス—近代天皇制国家における「母性」と宗教的シンボル」『表現学部紀要』9: 41-56。
- 藤田観龍
2011 『平和のアート（彫刻）戦争の記憶—核のない未来へ』本の泉社。
- 福間良明
2011 『焦土の記憶—沖縄・広島・長崎に映る戦後』新曜社。
- 福島和男
2008 『平和記念公園の下に眠る幻の中島界限—原爆 家族を探して』。
- 速水侑編
2000 『観音信仰事典』戎光祥出版。
- 広島県歴史教育者教義委員会編
1984 『原爆モニュメント物語』。
- 広島供養会編
2006 『慰霊の記録—原爆供養塔（増補版）』。
- 今井信雄
2001 「死と近代と記念行為—阪神・淡路大震災の「モニュメント」にみるリアリティ」『社会学評論』51(4): 412-429。
2006 「分裂する天蓋—阪神淡路大震災をめぐる追悼・慰霊のかたち」国際宗教研究所編『現代宗教』274-297頁、東京堂出版。
- 岩崎和子
2009 「観音像に見られる女性像」『歴史評論』

- 708: 4-17。
 国立歴史民俗博物館編
 2003 『「非文献資料の基礎的研究」報告書—近現代の戦争に関する記念碑』。
- 小松和彦
 2002 『神なき時代の民俗学』せりか書房。
- 黒川万千代編
 1982 『原爆の碑—広島のことろ』新日本出版。
- 松田素二
 『平和のフェティシズム考—文化的フェティシズムの新たな地平』田中雅一編
 『フェティシズム論の系譜と展望』241-273頁、京都大学学術出版会。
- 水田九八二郎
 1993 『ヒロシマ・ナガサキへの旅—原爆の碑と遺跡が語る』中央公論社。
- 森村敏己編
 2006 『視覚表象と集合的記憶—歴史・現在・戦争』旬報社。
- 長崎観音建立奉賛会編
 1973 『長崎観音建立趣意書』。
- 長崎国際文化会館編
 1986 『碑は訴える—被爆40周年記念』。
- 長崎市役所編
 1979 『長崎原爆戦災誌 第二巻 地域編』。
 2006 『長崎原爆戦災誌 第一巻 総説編改訂版』。
- Nelson, John
 2002 “From Battlefield to Atomic Bomb to the Pure Land of Paradise: Employing the Bodhisattva of Compassion to Calm Japan’s Spirits of the Dead,” *Journal of Contemporary Religion*, 17(2): 149-164.
- 西井麻里奈
 2013 「韓国人原爆犠牲者慰霊碑と「聖地」の論理—「聖地とヒロシマ」をめぐる一考察」『日本学報』32: 67-86。
- 西村 明
 2006 『戦後日本と戦争死者慰霊—シズメとフルイのダイナミズム』有志舎。
- 西尾隆昌編
 1982 『広島のいしぶみはみつめる』。
 2000 『広島のいしぶみはみつめる 第二集』。
- 沼 義昭
 1979 『限りなき慈しみ〈観音〉』校成出版社。
 1990 『観音信仰研究』校成出版社。
- 関沢まゆみ
 2008 『「戦争と死」記憶と語り』関沢まゆみ編『国立歴史民俗博物館研究報告』147: 7-34。
- 清水恵美子
 2004 「日米における『母なるもの』の表象—岡倉天心とその周辺について」『F-GENS ジャーナル』2: 99-106。
- 清水 顕
 2013 『ヒロシマの仏石写真集—地蔵の記憶』ひろしま女性学研究所。
- 宅和 純
 1996 『ヒロシマの碑』広島県教育用品株式会社。
- 手塚千鶴子
 2003 「日米の原爆認識—「沈黙」の視点からの一考察」『異文化コミュニケーション研究』14: 79-97。
- 若桑みどり
 2000 『戦争がつくる女性像—第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房。
- 米山リサ
 2005 『広島—記憶のポリテクス』岩波書店。

Memory of the Atomic Bomb and Statues of Kannon: A Case Study of the Hiroshima and Nagasaki Peace Parks

KIMISHIMA Ayako

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),
School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese History

This paper discusses how the statues of Kannon (Avalokitesvara) in the peace parks that were established in the hypocenters in Hiroshima and Nagasaki have helped to pass on the memory of the “atom bomb dead” and the “atom bomb disaster.” The statues of Kannon that have been erected there serve as one form of monument. I consider that there are two directions in the “memory” thus represented. One is the “social event” of the atomic bombing and memory directed toward the “collective anonymous dead,” and the other is memory directed toward the “dead with names.” In this analysis, the statue of Kannon, representing memory in the social and anonymous direction, is classified as a *monument*, and memory in the individual direction is classified as a *grave marker*.

As an object of Buddhist belief, the statue of Buddha is often established for the worship and remembrance of the dead whose faces their friends and families can still remember and for whom the meaning of *grave marker* is stronger. However, among all the images of Buddha, the statue of Kannon has also come to be a *monument*, as a symbol in latter-day thought of “motherhood” as well as a monument conveying the tragic memory of the atom bomb as an allegory of “peace” and “post-war Japan.”

The peace parks, developed after the war in the hypocenters of Hiroshima and Nagasaki that instantly became burnt-out areas due to the atom bombs, are where today large-scale peace memorial ceremonies are held every August. I have interviewed people who have come to pray during the August ceremonies. As a result, I have learned about their family members who died on the sites of the peace parks. Because the current peace parks are the places where their relatives lost their lives, the days of the peace memorial ceremonies have also become for the families the days for family commemoration of the anniversary of their deaths. The peace parks established by the nation have also become huge “monuments” to tell the memory of the collective dead to the countless number of people who visit there. However, different from a monument written in characters, the statues of Kannon in the parks have also become *grave markers* to evoke the memory of the individual dead. This meaning of the statues of Kannon may change, and may eventually come to express folk beliefs in Buddha, or another allegory of “peace” as a part of the larger *monument* complex, when living persons no longer have a memory of the individuals who perished there.

Key words: Kannon, motherhood, memory, atom bomb dead, monument, grave marker